

Patient-Subject 構造論

小 川 洋 通

(1978年10月20日受理)

ON PATIENT-SUBJECT CONSTRUCTIONS IN ENGLISH

Hiromichi OGAWA

0. Patient (受動者, ないし被動作主) は patient であり, agent (動作主) は agent である。

これは同語反復 (tautology) であり, 自明の理である。ここには, なんらの含意もない。

しかしながら, ここに patient が, あたかも agent であるかのように振るまう言語現象がある。それが, ここにいう Patient-subject 構造である。⁽¹⁾ この構造は, 形態的には能動態 (Active) であるが, 意味的には受動態 (Passive) のようにふるまうことから, 一般には, 能動受動態 (Activo-passive)⁽²⁾ と呼ばれている。

1. つぎのような文を考えてみよう。

(1) a. This wine *drinks* like it was water.

(水のように飲む)

b. The car *drives* well.

(よく走る)

c. A good tent *puts up* in about two minutes.

(二分ほどで張れる)

これらは, 動詞によって表わされる行為の patient, このばあい, 典型的に無生 (inanimate) であるが, これが, 主語として表現され, その agent は表現されない構造である。しかも, このばあい動詞は能動態のままである。

これは, 動詞に対する主語の関係についていえば, 通常の文とは異なっている。動詞が能動態であるばあい, 主語と動詞との間にみられる通常の関係とは, どのようなものであろうか。つぎのような文をみてみよう。

(2) a. Mary hit the ball.

b. Sam bought a new suit.

c. Delia washed the dishes.

ここにおいて, それぞれ主語は, 意志を有する (volitional, or intentional) agent である。その意志による働きで, 動詞によって表わされる行為が生じる。主語は, それゆえ, 動詞によって表わされる行為に対して責任をもって (responsible) いる。行為の結果としては, 対象 (物) に, ある変化をもたらす。その変化は, その対象 (物) に固有の特性のばあいもあれば, ある思いがけない, 偶然的な状態のばあいもある。

ただし, これが常にあてはまるというわけではない。もちろん例外もある。たとえば, つぎのような文においては, 動詞によって表わされる行為が, 意志によるばあいと, そうでないばあいとでありうる。

(3) John broke the glass.

(わざと割った / うっかりして割った)

また, 心理状態 (inner states) をあらわす動詞も, その行為は意志によるものではない。

(4) a. I feel sick.

b. H.I. loves J.K.

c. Penny realized she was going to be late.

これらの主語は, いわゆる experiencer (経験者) であり, (2)におけるような agent とは異なっている。

典型的な agent-patient 構文, つまり愛用の文型式 (favourite sentence-form) である, 行為者・行為・目標 (actor-action-goal) 型がもつ特徴としては, つぎのようなものがある。⁽³⁾

(5) a. agent があり, それは, なんらかの行為をおこなう。

b. patient があり, それは, ある新しい状態の変化をうける。

c. patient のうける変化は, agent による

行為から引き起こされる。

- d. agent のおこなう行為は、有意志的である。
- e. agent は、みずからおこなうことを制御して (in control of) いる。
- f. agent は、でき事に対して、主として責任がある。
- g. agent は、行為における行動力の起点 (source) であり、patient は、その行動力の着点 (goal) である。

2. いま、(1)に対応するものとして、つぎのような文が考えられる。

- (6) a. We can drink the wine like it was water.
- b. Gerald drives the car well.
- c. Marcia put up the tent in about two minutes.

ここで *the wine, the car, the tent* は、事がなされる対象、つまり patient であり、けっして事をおこなうところの、意志を有する agent ではない。それらが、(1)においては、主語としてあらわれているのである。

しかしながら(6)は、(1)と等値なものではない。たとえば、(6b)のような文においては、車がよく走るのは、主として運転手の責任においてである。それに対して、(1b)のような文においては、それは車自体の特性による。前者では、運転手が運転上手なのであり、後者では、車の特性がゆえに運転しやすいのである。

Well がかわるのは、一方では agent としての運転手の特性に対してであり、他方では patient としての車の特性に対してである。

Patient-subject 構造は、おおくの点で制限をうける。たとえば、つぎのような文は非文法的である。

- (7) a. *The wine drinks right out of the refrigerator.
- b. *The car drives if we have gasoline.
- c. *The tent puts up in my back yard.

これは、この構造の容認可能性が、副詞の型によって異なってくることを示している。

さらには、つぎのようなばあいがある。

- (8) The clothes wash with no trouble because...

(わけなく洗える)

- a. ... they're machine-washable.
- b. *...I have lots of time.⁽⁴⁾

これを、さきの(1b)の文に当てはめてみれば、*because* 節に生じるものは、たとえば、つぎのようなものになるであろう。

- (9) The car drives well because...
 - a. ...it is very streamlined.
 - a'. ...I just had its ball-bearing greased.

これらが示していることから、つぎのようなことがいえる。つまり、patient が主語にあらわれるとき、それは、動詞によって表わされる行為に責任がある、とみなされているのであると。

ところで、さきに(2)に関して述べたように、動詞によって表わされる行為に責任がある、という特徴は、まさに agent のもつ特徴であった。したがって、Patient-subject 構造とは、ある行為の patient が、あるていど agent として働いていることを示すために用いられる構造であるといえる。

(7)が非文法的であるのは、patient のもつ特性が、述部(全体)によって表わされる行為と、なんらの必然性も持たないからである。つまり、これらのばあい、patient は、述部によって表わされる行為に対して、いかなる責任もないのである。

3. 同じように patient が主語の位置にあらわれる、つぎのような受動文の構造と、Patient-subject 構造との違いは、なんであろうか。

- (10) The car was driven well.

形態的な違いとしては、受動文のばあいには、動詞が受動態となっているのに対し、Patient-subject 構造のばあいには、それが能動態であることである。後者のばあいには、主語の patient があたかも agent のごとくに、動詞によって表わされる行為に責任があることを示している。これに対して、前者のばあいには、patient が文字通り、動作をうけるものとして働くのであり、動詞によって表わされる行為に責任があることを示しはしない。

通常の「be + 過去分詞」型受動文では、動詞によって表わされる行為に責任があるのは、agent であり、それは、ふつう *by* でもって示される。これに対し、Patient-subject 構造では、これまで見てきたように、agent にではなく、まさに patient に、動詞によって表わされる行為の責任がある。

(10)において、車が上手に運転されたのは、車の特

性によってではなく、運転手の力量によってである。

*Well*がかかわるのは、*patient*の特性にではなく、*agent*の特性にである。

一方の(1)のような Patient-subject 構造においては、動作の過程に視点が向けられている (process-oriented) のに対し、他方の(10)のような受動文においては、*agent*のほうに視点が向けられている (agent-oriented) のである。後者のばあい、「*agent*が明示されていないのは、*agent*がないことを意味するのではない。明示すると目立ちすぎる *agent*がいるということである。」⁽⁵⁾

4. Patient-subject 構造と、意味的にも構造的にも類似した、ここに Reflexive-patient-subject 構造と呼ぶことのできるものがある。⁽⁶⁾

- (11) a. Those dresses sell themselves.
b. Rolls Royces drive themselves.
c. These clothes wash themselves.

対応する Patient-subject 構造は、つぎのようである。

- (12) a. Those dresses sell easily.
(すぐに売れる)
b. Rolls Royces drive easily.
(運転しやすい)
c. These clothes wash easily.
(手軽に洗える)

(11)におけるような再帰代名詞の存在は、*patient*が、あたかも *agent*のごとく、いわば、みずからの力を有するがごとく働いていることを、まさに示している。ここには、また擬人法 (Personification) という問題も関与してこう。

Reflexive-patient-subject 構造は、しかし、*easily*をとることができない。

- (13) a. * Those dresses sell themselves easily.
b. * Rolls Royces drive themselves easily.
c. * These clothes wash themselves easily.

これは、*easily*が Patient-subject にかかわりもつ *patient* 性と、*themselves*が、それにかかわりもつ *agent* 性との、衝突に起因するものと思われる。

また、この構造は Patient-subject 構造よりも、いっそう制限をうける。

- (14) a. * This scotch drinks itself.
b. This scotch drinks easily.

- (15) a. * My bicycle rides itself.

- b. My bicycle rides easily

- (16) a. * My dissertation reads itself.

- b. My dissertation reads easily.

このことは、これらの動詞のばあい、その主語のもつ *patient* の度合がたかく、*agent* の度合のひくいことを示しているといえよう。

これは、いわゆる中間態 (Middle voice)⁽⁷⁾ と呼ばれるものに相当する。それは、一般に能動態と受動態の中間にあると考えられるもので、動作の方向性に関していえば、一方から他方へというのではなく、*agent* そのものに再帰的に働くことをあらわすものである。それが、しだいに受動の意味に転じたもので、これは、ドイツ語、フランス語などの再帰用法にも見られる。

したがって、ここにいる Patient-subject 構造、ないし能動受動構文が、中間態の名で呼ばれることもある。⁽⁸⁾

5. Patient-subject 構造には、おおくの制限がみられるが、ここで、それらのいくつかを見ることにしよう。

この構造では、一般に、副詞(あるいは形容詞)⁽⁹⁾が要求される。

- (17) a. * The wine drinks.
b. * The clothes wash.
c. * The floor cleans.

ただし、つぎのようなばあいは適格である。

- (18) a. Yes but will it sell ?
b. Does this dress wash or does it have to be dry-cleaned ?
c. The floor just won't clean.

このように、適当な文脈が与えられるならば、それは、とくに *Will (not)* が、しばしば用いられるが、副詞(あるいは形容詞)なしの文も可能になる。しかし、一般的には、なんらかの副詞(あるいは形容詞)を要求することによって、この構文は成立するようである。

なお、ついでながら、後述する(→ 7.) *open, break* のような動詞のばあいには、とくに副詞を要求することはしない。

- (19) a. The door opened.
b. The glass broke.

さらに、われわれは、また副詞の型によっても、Patient-subject 構造の容認可能性が異なってくる

ことを示した。(1)と(7)とを比較されたい。

つぎに示す *buy* と *sell* におけるように、動詞によって、Patient-subject 構造の容認可能性は異なってくる。

Sell は、たやすく Patient-subject 構造を許すが、*buy* は、ふつうそれを許さない。

- (20) a. The car is selling like hotcakes.

(飛ぶように売れている)

- b. *The car is buying like it was going out of style.

物を買うことを云々するとき、われわれは、あたかも買い手自身に責任があるかのように、それをとらえる。これに対し、われわれが物を売るときを云々するときには、売り手のみに責任があるとはしない。つぎのような会話を比較してみよう。

- (21) A: Why are you yelling at Alex ?

B: He bought a Jaguar, the idiot.

With his finances the way they are !...

- (22) A: Why are you yelling at Alex ?

B: *Somebody sold him a Jaguar.

前者の会話は成立するが、後者のばあい会話は成立しない。つまり、*Alex* をどなりつけることができるのは、彼が *Jaguar* を買ったからであって、誰かが彼に *Jaguar* を売ったからといって、*Alex* をどなりつけることはできない。

(20)において、売買に責任があるのは *the car* そのものであるとするなら、論理的には、*buy* であれ *sell* であれ、方向性の違いでしかなく、ともに可能はずである。しかしながら、上に見たように、売られるもの、ないし買われるもの、つまり *the car* が、売買に責任ありとして許すのは、*sell* のばあいであって、*buy* のばあいではないのである。

Patient-subject 構造の容認可能性は、主語になにを選ぶかによっても異なってくる。つぎの例文を比較されたい。

- (23) a. The clothes wash easily.

b. *The baby washes easily.⁽¹⁰⁾

(23b) が非文法的であるからといって、人間名詞 (human noun) が Patient-subject 構造の主語に、つねに生じえないわけではない。たとえば、ここに、つぎのような例がある。

- (24) a. I don't fool / shock / scare
so easily.

(そうかんたんに、だまされ /
おどろか / おびえ ない)

- b. Don't say such things to him.

He discourages very easily.

(すぐがっかりする)

6. Responsibility (責任) という特徴は、Agent-subject 構造に、つねにあらわれるが、intention (意志) や control (制御) という特徴は、そこに、必ずしもあらわれる必要はない。たとえば、それは、さきに(3)で述べた、つぎのようなばあいである。

- (25) John broke the glass accidentally.

このように、intention や control ではなく、まさに responsibility は、それは、Patient-subject 構造を成立させる必要条件でもあるが、主語であること (subjecthood) を示す、もっとも重要な特徴であるといえる。

主語とはなにか、というに、それは responsibility⁽¹¹⁾ である、ということになる。

7. ここで、能格性 (Ergativity)⁽¹²⁾ について述べなくてはならない。

- (26) a. John opened the door.

b. The door opened.

c. The door opened itself.

d. The door was opened.

能格性とは、(26a) と (26b) におけるように、他動詞文の目的語と自動詞文の主語との間にみられる呼応関係をいう。

ほんらい、バスク語、エスキモー語、グルジア語などにおいて、他動詞文の目的語と自動詞文の主語が同一の格変化をし、他動詞文の主語は、これと異なる格 (能格) 変化をする言語を、ergative 型という。

これに対して、印欧語などにおいて、他動詞文、自動詞文の主語が同一の格変化をし、他動詞文の目的語は、これと異なる格 (対格) 変化をする言語を、transitive 型⁽¹³⁾ という。

したがって、能格性は、また他動性 (Transitivity) ということにもかかわる。このばあい、他動性とは、動詞によって表わされる行為の影響が、agent ないし actor から、patient ないし goal に及ぶということである。

なお、ergative は、もともと 'cause', 'bring

about', 'create' を意味する語からつくられており、能格性は、また使役性 (Causativity) ということにも⁽¹⁴⁾かかわる。

これは、けっきょく、自動詞 (Intransitive verb)、他動詞 (Transitive verb)、使役動詞 (Causative verb)、また両義動詞 (Double-sided verb) といった、動詞のもつ側面にかかわる現象でもある。

われわれが考察を与えてきた、Patient-subject 構造は、これを、ひろく能格性を示すものであるということができよう。図に示した (a), (b), (c), (d) のあいだの関係については、これまで Patient-subject 構造に関して述べてきたことが、やはり、そのまま当てはまるであろう。

Patient-subject 構造と (26b) のような構造の違いはというに、それは、前者の方が後者よりも、よりいっそう、その構造に制限をうけていることである。また、前者の方が、その動詞の他動性が強く、それゆえに受動的な特徴を意識させることである。⁽¹⁵⁾なお後者のばあいは、ほんらい、その動詞が自動詞であるとみなされている。

二つを分かつ大きな特徴は、この受動的な意味あいを含むか否かである。しかし、その区分は、けっして簡単、明快なものではないであろう。残された問題が、ここにある。

8. Patient-subject 構造の若干の例。

His play does not *act* well.

(うまく舞台にのらない)

The test *applies* to every supposition.

(あらゆる仮説に適用できる)

The bread doesn't *bake* well in this oven.

(うまく焼けない)

My collar won't *button*.

(ボタンがどうもかからない)

The potatoes *cook* slowly.

(煮えがおそい)

This cloth does not *cut* well.

(うまく裁てない)

She *dresses* badly.

(着こなしがまずい)

This shirt *dries* quickly.

(乾きがはやい)

This fish *eats* well.

(おいしい)

Velvet *feels* soft.⁽¹⁶⁾

(手ざわりが柔らかい)

The room *filled* rapidly.

(どんどんいっぱいになった)

Meat will not *keep* in hot weather.

(もたない)

This suitcase would not *lock*.

(錠がかからない)

Cars must not *park* in front of this building.

(駐車してはならない)

She *photographs* well.

(写真うつりがよい)

This scientific paper *reads* like a novel.

(小説のように読める)

Such houses *rent* easily.

(手軽に借りられる)

This wood *saws* easily.

(かんたんにのこぎりで引ける)

This lily *smells* sweet.

(よいにおいがする)

Damp matches won't *strike*.

(なかなか火がつかない)

This medicine *tastes* bitter.

(にがい)

This paper does not *tear* easily.

(なかなか裂けない)

Does his novel *translate* easily ?

(翻訳しやすいかね)

This pen *writes* smoothly.

(すべりがよい)

さらには、ここに、つぎのようなものも加える。

Mary is *to blame*.

(わるい)

This house is *to let*.

(貸し家です)

He is *easy to deceive*.

(だまされやすい)

That man is *hard to deal with*.

(扱いにくい)

His language won't *bear repeating*.

(二度といえたものではない)

These shoes *need mending*.

(修繕が必要だ)

The house *is building*.

(建築中です)

The book *is printing*.

(印刷中です)

To blame, to let は、いわゆる Passival supine (受動的不定詞)。*Easy, hard*, (そのほか *impossible, simple, tough* など) のばあいには, *Tough movement* (目的語繰上げ変形) をうけた結果である。⁽¹⁷⁾ *Bear, need*, (そのほか *deserve, require, want* など) は、受動的な意味をもつ動名詞をしたがえる。*Is building, is printing* は、「be + 現在分詞」なる形をした、受動の意味をあらわす進行形。

9. 能格構文の若干の例。

begin the play. / the play *begins*.

benefit the community. / the community *benefits* by this railway.

boil the water. / the water *boils*.

break the ice. / the ice *breaks*.

end the discussion. / the discussion *ended* at 10.

fell the tree. / the tree *falls*.⁽¹⁸⁾

fly the kite. / the kite *flies*.

grow corn. / corn *grows*.

heal a wound. / the wound *healed* slowly.

kill the duckling. / the duckling *died*.

lay the book on the table. / the book *lies* on the table.

march the prisoners. / the prisoners *marched*.⁽¹⁹⁾

move the stone. / the stone *moves*.

ring the bell. / the bell *rang*.

ripen the apples. / the apples *ripen* in the sun.

roll the ball. / the ball *rolls*.

shine the brass. / the brass *shines*.

sink the boat. / the boat *sinks*.

stand the box on the floor. / the box *stood* on the floor.

stop the train. / the train does not

stop here.

walk the horse. / the horse *walked*.

work his servants hard. / the servant will *work* hard.

注

- (1) van Oosten による。以下の論議を van Oosten (1977) によってすすめる。
- (2) Jespersen (1927, §§ 16.8, 18.29) の用語。Sweet (1891, § 249) は、これを Passival verb (受動的動詞) と呼ぶ。さらには Poutsma (1926, chap. XLVI, §§ 32-4) 参照。
- (3) Lakoff (1977, p.244)。彼は、さらにいくつかの特徴をあげているが、ここでは省くことにする。
- (4) ただし、つぎのように *the clothes* が、主語になければともに容認可能である。
 - (i) It's no trouble to wash the clothes because...
 - a. ...they're machine-washable.
 - b. ...I have lots of time.
- (5) 安井 (1975)。
- (6) Lakoff (1977, pp. 251 ff.)。
- (7) あるいは、Reflexive voice。たとえば Poutsma (1926, chap. XLVIII)。
- (8) これについては、van Oosten (1977, pp.468-9, note 1.) の論評参照。
- (9) 注の(10)を参照。
- (10) ただし、つぎのような文脈においては、それは適格である。
 - (i) A baby washes more easily than an armadillo.
- (11) 主語とはなにか、をめぐる問題については、安井 (1974)、さらに安井 (1975, 1978) を参照。
- (12) Lyons (1968, pp. 341 ff.) を参照。さらには Poutsma (1926, chap. XLVI), Jespersen (1927, chap. XVI), Curme (1931, chap. XXI)。
- (13) あるいは、'ergative' system に対する、'accusative' system。たとえば, Fillmore (1968, p.14) 参照。
- (14) 他動性、使役性という観点から、能格性をとらえようとしたものに、中野 (1970) がある。
- (15) 山川 (1968, p. 85)。
- (16) この *feel* や *smell, taste* といった知覚動詞のばあいは、その後に形容詞をとるのが普通である。たとえば, Hornby (1975, § 4.32) などを参照。
 後藤 (1971) は、これによって、能動受動構文を、おおきく形容詞型と副詞型とに分ける。ただし、副詞型、これは、われわれがここにあげた例のほとんど

- がそうであるが、それは、また形容詞で表現されるばあいもあることに注意。これについては、Poutsma (1926, p. 66), 大沼 (1968, p. 44) などを参照。
- ⑪ van Oosten (1977, pp. 467-8) にも言及あり。
- ⑫ このように *fell / fall, lay / lie*, さらに *kill / die* などは、形態を異にしている。
- ⑬ この *march, walk, work*, さらに *run, swim* などは、典型的に有生な (animate) ものをとる。
- Yamakawa, K. (山川喜久男) 1968. 『主題と陳述 (下)』英語の語法・表現篇, 第8巻. 東京: 研究社.
- Yasui, M. (安井 稔) 1974. 「主語とは何か」『英語学の世界』25-58. 東京: 大修館.
- 1975. 「受身文と非動作主主語」『英語文学世界』3: 2-5, 29.
- 1978. 「受動文と主語型言語」『英語青年』7: 11-3.

参考書目

- Curme, G. O. 1931. *Syntax*. Boston: Heath.
Rept. 東京: 丸善.
- Fillmore, C. 1968. The case for case. In Bach, E. and R. T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*. 1-88. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Fukumura, T. (福村虎治郎) 1965. 『英語態 (Voice) の研究』 東京: 北星堂書店.
- 1954. 『時制と態』英文法シリーズ, 第11巻.
東京: 研究社.
- Gotō, M. (後藤正紘) 1971. 「能動受動構文について」『岐阜大学研究報告 (人文科学)』第20号, 9-14.
- Hornby, A. S. 1975. *Guide to patterns and usage in English*. Second edition. London: Oxford Univ. Press.
- Jespersen, O. 1927. *A modern English grammar on historical principles*. III. Copenhagen: Munksgaard.
- Lakoff, G. 1977. Linguistic Gestalts. *CLS* 13: 236-87. Chicago: Univ. of Chicago.
- Lyons, J. 1968. *Introduction to theoretical linguistics*. London: Cambridge Univ. Press.
- Nakano, H. (中野弘三) 1970. 「英語における ergativity 考察」『英語学』3: 34-50.
- Ōnuma, M. (大沼雅彦) 1968. 『性質・状態の言い方, 比較表現』英語の語法・表現篇, 第3巻. 東京: 研究社.
- Poutsma, H. 1926. *A grammar of late modern English*. II, sec. II. Groningen: Noordhoff.
Rept. 東京: 千城書房.
- Soranishi, T. (空西哲郎) 1954. 『動詞』英文法シリーズ, 第10巻. 東京: 研究社.
- Sweet, H. 1891. *A new English grammar* I. Oxford: Clarendon Press.
- van Oosten, J. 1977. Subjects and agenthood in English. *CLS* 13: 459-71. Chicago: Univ. of Chicago.